
ドラゴンズソウル 竜の魂

長月 四郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンズソウル 竜の魂

【Nコード】

N3217Y

【作者名】

長月 四郎

【あらすじ】

これは魔法や魔物の存在が現実のものとして認識されている世界での話である。

ドラゴン

竜の体（鱗など）は特殊な金属のような素材で出来ていて、これを原料にして鍛えた剣や槍が魔法を使うための媒体となることが、一部の者の間で既に知られていた。

火を吐く竜がいるように、竜の鱗から作られた剣を人が使用することで、そこから火を発することが出来るようになるという訳であ

る。それは人間にとっては、まさに魔法であり、その剣はまさに魔法の剣という訳だ。しかし、誰でも簡単に使えるわけではない。使用者の「精神力」魂」があるレベルまで鍛え上げられてこそ魔法は発動するのである。

人はそれを”ドラゴンズソウル（竜の魂）”と呼んだ。

物語は、このドラゴンズソウル（竜の魂）の使い手であるロラン・バレーヌという少年が、訳あって王都カルカス・ソナーへ向かう道中に、追手から追われている少女を助けるところから始まる。

助けてもらった少女は、無理を承知でロランに護衛を依頼するのだが……。

ドラゴンズソウル（竜の魂）という魔法を巡る新たな冒険譚が、今幕を上げる。

序章 燃ゆる魂

これは魔法や魔物の存在が現実のものとして認識されている世界の話である。

竜ドラゴンの体（鱗など）は特殊な金属のような素材で出来ていて、これを原料にして鍛えた剣や槍が魔法を使うための媒体となることが、一部の者の間で既に知られていた。

火を吐く竜がいるように、竜の鱗から作られた剣を人が使用することで、そこから火を発することが出来るようになるという訳である。それは人間にとっては、まさに魔法であり、その剣はまさに魔法の剣という訳だ。しかし、誰でも簡単に使えるわけではない。使用者の「精神力」魂があるレベルまで鍛え上げられてこそ魔法は発動するのである。

人はそれを”ドラゴンズソウル（竜の魂）”と呼んだ。

カルカス王国の王都カルカス・ソナー（カルカスの勝利の鐘）へ向かう東の街道を、一人の少年が足早に歩いている。少年の名は口ラン・バレーヌ、歳は18である。

口ランは一般の旅人と言える服装をしていた。だが、見た目に少々違和感もあった。腰に佩いている剣（ブロードソード）がいささか物々しく感じられるからだ。と言っても許容範囲ではある。最近では王都の付近といえど野盗や魔物が出没すると噂も立っている。彼のような少年が外出するのに多少の武装していても、それ程おかしくはないのかもしれないからだ。ただ、この付近の住民が街道を通って王都へ向かうのに、わざわざ武装してはいないと比較すると、彼がよそ者であるという印象は拭えないだろう。

今、ロランの歩いている街道のこの付近は、よく整備された平らな道で4、5人が並んで通れる程の幅があった。しかし、両側は深い森であるため、まだ昼間なのに少し暗いのと、秋に差し掛かったばかりの季節にしては肌寒かった。通常、森林浴などと言われるように森の中を歩くは気分の良いものではないだろうか。だが、この時のロランは、ある種の違和感から全く逆の感想を持っていた。

「この森は静か過ぎる。早く抜けた方が良さそうだな。」

ロランはそう独り言を言って、まるで何かに急ぎ立てられるかのように更に歩みを速めるのだった。

そこから、数十メートルも行かないぐらい先で道は右に折れ曲がっていた。その先は森が少し開けているのかその曲がり角の先は明るく見える。

ちょうど、その曲がり角の手前にロランが差し掛かった時である。曲がり角の先、光の中から、一人の少女が風を伴って目の前に飛び出してきたのだ。曲がり角の先は両者とも見えていないがために、そこで鉢合わせになるまで、どちらも気が付かなかったのである。

少女は驚いた表情を見せ、咄嗟に半歩退き、言った。

「あ、あなた　　追手？」

少女は散々走ってきたのだろう。肩を激しく上下させている。鋭い目つきでロランを睨み、右手に持った短剣の切っ先をロランの眉間に向けるのだった。

ロランは突然のことで何の事か分からなかったが、とにかく敵ではないと示すために手のひらを向け両手を挙げ「違う。」と短く返した。

「そう、ごめんなさい。」

そう言うと少女はロランに向けていた鋭い視線をそらし、一つ深く呼吸をした後、何か決意をしたかのようにして再び走り出し、彼のそばを駆け抜けていった。

年の頃はロランと同じ位であろうか。ロランは彼女が去っていく際に起こした風が、爽やかな花の香りを運んできたように感じられた。彼女は「追手」と言っていた。誰かに追われているのだろうか。見た目は彼女も旅装と言っているような動きやすく地味な服装をしていたが、やはり武器を手にしていることから、この辺の住民というわけではないのかもしれない。そもそも「追手」と言っている以上、彼女自身が罪を犯して逃げているということなのだろうか。しかし、野盗や盗賊のような罪人には見えない。どこか凜とした雰囲気漂わせているからだ。

だから、ロランはその少女の事が気になった。というものがあつたらう。だが、それ以上に彼女の行く手について言っておかなければならない事があり、振り返る必要があつた。

「待て！！それ以上行くな！！」

突然の大声に少女は立ち止まる。まだロランから離れること数歩の距離であつた。少女は立ち止まったまま黙って振り返って大声の主を顧みる。彼女はやはり呼吸が乱れている。もしかしたら、立ち止まったのは急に呼び止められたからという訳だけではないのかもしれない。

「ハア、ハア

何の用？やっぱり、あなた、追手だったの

「？」

ようやく少女がその声を出した時には、すでにロランは彼女のそばまでたどり着いていた。そして、まるで彼女の声を無視するかのようには彼女の脇を通り過ぎ、今度は静かな口調で言うのだった。

「この先に行つてはいけない。この先には……………」

ロランがこの先と言っているのは、さっきロランが通つて来た道の事である。その時ロランは何か見たというのか？

「この先に何がいるつて……………」

少女はロランに問いかけようとしたが、途中でやめた。答えが目の前に現れたからである。

ついさつきまで鳥の鳴く声が遠くで聞こえていた気がしたのだが、今は森の中は死んだように静かである。そして太陽に雲がかかったのか、辺りが徐々に暗くなっていく……………」

ロランは黙つて少女を庇うようにして背を向けたままその前へ出る。目の前に見える異様な光景に彼の目付きは鋭くなり、次いで嫌悪の表情を見せた。

森の木々の合間から彼らの前に現れ出たのは3体の兵士

それも白骨だけとなった異様な姿の兵士である。皆一様に右手に剣（ブロードソード）と左手に円形の盾を持ち、カタカタと乾いた骨同士がぶつかり合うような音を鳴らしながら近づいてくる。だが、一見ぎこちなく見えるその歩みは決して遅くはなかった。

「竜の牙か。噂は本当だったんだな。」

ロランはまるでそのカラクリを知っているかのようなようであった。確かに、竜の牙を人間の骨に埋めることで、あたかも生きた人間のようには操ることが出来るといふ噂はある。これも「ドラゴンズソウル（竜の魂）」の一種ということだろう。

しかし、いくら事情を知っていたとしても、普通の人ならその光景を目の当りにしたら、少しはたじろぐであろうに、このロランという少年は、そんな素振りは一切見せず、むしろ勇敢にも腰に佩いていた剣（ブロードソード）を抜いて、応戦する構えを見せた。

使い古されたそのロランの剣は、見た目にも古ぼけていてお世辞にも立派なものとは言えなかった。いや、そんな全体の雰囲気はどうでもいいのだ。それよりもっと決定的な欠陥がその剣にはある。その刀身の先3分の1が事もあろうか折れて無くなっているのである。流石に錆びてはいないようだが、なんとも心許無い。というより、そんな折れた剣で戦おうなんて、これはもう滑稽でさえあった。

「あなたには無理よ。そこをどいて。やつらは普通の武器では簡単には倒せない。ましてその剣？ 奴等の狙いは私なの。だから、あなたは逃げなさい。」

少女は再び自分の短剣を体の前へ掲げ、左手をその剣の柄に添え、両手で持って構え直した。

ロランは軽く振り返って彼女のそんな姿に一瞥をくると、

「きみの方が勝ち目がないさ。手が震えてる。」

と言って、聞く耳を持たず、むしろ左足で蹴って軽く跳躍し、骸

骨戦士達の前へと躍り出るのだった。

少女は自らの両手を見る。それは確かに震えている。しかし、それでも顔を上げ、再びロランを止めようと声をかけようとするのだが、もう遅かった。

すでに先頭の骸骨戦士1体が、剣を振りかぶってロランに襲いかかるうとしていた。

ロランは、そのまま右手に構えた剣の、約七割しか残されていない刀身を横に傾け、木こりが斧を木に打ち付けるかのようにして、振り下ろして迎え撃つ。

万事休す。少女は思わず目を背ける。その時「ボツ」というマツチで火をつけたような音がして、続けてそれが風に煽られたような音に変わったのを聞いた。

少女は見た。両手を交差したまま剣を構える少年とその前で体を上下真つ二つにされて崩れ落ちる骨の塊を。骨の塊は切り口から静かに灰になって行く。後に残された持ち主のいない剣と盾が、むなししい金属音を立てて地面に落ちた。

「うそ。。」

仲間の1体がやられても残り2体の骸骨戦士は全く怯む様子はない。元は人間だったのだから、こうして骨だけで復活した今は、やはり感情は持ち合わせていないようである。それでもロランの事は敵とみなしたらしく、今度は2体が左右に展開し、そろって同時に襲いかかって来るといふ共闘の姿勢を見せた。

少女は今度は一部始終を見届けようと思ひ、目を背けようとはしなかった。

左右からタイミングを合わせ同時に遅いかかって来る骸骨戦士に

対し、ロランは剣を振りかぶって上段に構え、

「しゃらくせえ！」

と言わざま斜めに振り下ろす。

しかし、まだ間合いは遠い。例え彼の剣の刀身が折れていなくても、その剣先は対象物には届かない距離ではないだろうか。剣は振り下ろされる途中、やはりまた点火したような音を放ち、その瞬間から刀身はまさに赤い炎をまとって見せた。炎はまるで失われた3分の1の刀身を再生するかのように刀身にそって伸び、一瞬にしてその炎の刀身は、おそらく折れる前の刀身の2倍はあるのではないかという長さに達する。これなら十分届く長さだ。その炎の大剣は、左右から来る骸骨戦士を赤い一筋の光の元、まとめて一刀両断した。

2体の骸骨戦士もロランの炎の大剣の前には、やはり成す術はなく、前の1体同様、切断面から灰と化して断末魔の悲鳴を上げることもなく静かに消えていくのだった。

「ドラゴンズソウル（竜の魂）……あなた何者なの？」

少女は肩の力を抜き、短剣を構えるのをやめた。その眼差しも少し穏やかになったように見える。

竜の体から作った武器は、使いこなせる者が使えば炎（魔法）を発することが出来るという程度の知識は、この世界に生きるものなら持っているもおかしくはない。その力を「ドラゴンズソウル（竜の魂）」と呼ぶ事も然り。ましてや彼女は骸骨戦士が通常の武器で容易に倒せないことを知っていたのだから、むしろこの手の話には詳しいのかもしれない。もしかしたら、彼女もその使い手なのだ

ろうか。

ロランは彼女の質問には答えず、

「やつら（骸骨戦士）は、この先にはいないはずだ。もう引き止めはしない。」

と返すのみだった。

さっきまで炎をまとっていたロランの剣は、既にその名残も無く、普通の刀身（と言っても先は折れ古ぼけたままだが）に戻っていた。ロランはその刀身を無造作に鞘に納めると踵を返し、元々向かっていた王都カルカス・ソナーへ向かう方向へと、少女を置き去りにしたまま、歩き出すのだった。

すると少女は慌ててロランの後を追って、

「ちょっと待って。待っててばあ。」

と同じ速度でついて行くのだが、ロランは素知らぬふりをして歩き続ける。だが、彼女も引き下がらない。

「ちょっと待って。お願い、私を国境まで護衛して欲しいのだけど。いくらでもお金は払うから。私にはあなたのような力トランクスワールは無いのだから、お願いします。」

ロランは立ち止まり、つられて少女も立ち止まった。

「俺は王都へ急いでいる。国境といたら、全く逆方向だ。悪いけど一緒に行くわけにはいかない。」

ロランは本当に困ったというふうな顔をした。しかも今は、骸骨

戦士を倒したときのような鋭い目付きからは、想像もできないほど穏やかな目をしている。案外やさしい心の持ち主なのかもしれない。

「それじゃあ、近くの宿屋までなら、どお？」

少女はそう言うとロランの前に踊り出て、ロランの顔をのぞきこむようにして見上げた。

二重の瞼に黒く大きな瞳、その瞳は少し潤んでいるようにも見える。ロランは思わず目をそらしてしまった。

「このまま国境へ向かって日も没までに次の街に着くことはできないわ。あなただって、このまま王都へ向かっても着く頃には日が暮れていて、城門は閉められているから中に入れない。王都は、守衛が厳しいから日が暮れてから中に入れてくれることなんて絶対にないの！それに最近、王都の付近は夜、魔物が出るって噂だし野宿は危険よ。実際、犠牲者が何人も出てるって聞くし。」

少女は相変わらずロランの顔を見つめ続けている。ロランは目をそらしながらも、そんな彼女の視線を感じていた。

「このままこの道を進むと分岐があるの。そこを右に行けば王都だけど、左に行けば一時間足らずで宿場町に着けるのよ。そこへ行くならあなたにとっては大して遠回りにならないし、私も少なくとも明日の朝までは危険な目に遭わないで済むし。これって名案じゃない？」

少女は今度は明らかに嬉しそうな目をして微笑みかける。まったくこの女性は泣いたり笑ったり忙しい。

ロランは少しわざとらしく、ため息をついてから、

「分かった。その案に乗るよ。」

と言ってみせた。

「ほんと？ありがとうございます。それじゃあ、宿代は勿論私持ちとして、護衛代としていくら払えばいい？」

「いらない。宿代も自分の分は自分で払う。」

「え？いいの？それで……。」

「道案内してくれるんだろう。護衛代は道案内代で十分だ。それに、どうせ国境まで行っても、きみの旅は終わりじゃないんだろう？だったら、お金はいくらあっても足りないんじゃないか。」

ロランは少女の笑みにつられて自分も微笑んでいることに気づいているだろうか。

「ありがとうございます。意外と優しいんだね。あ、そうだ。まだ名前聞いてなかったね。あなたの名前は？」

「ロラン・バレーヌ」

「いい名ね。私はセレーヌよ。えっと、セレーヌ・マルシェ。よろしくね。」

ロランは軽く頷くだけで、何も言わず、いや言えなかったのか、なんだかばつが悪そうである。しかし、そんな雰囲気吹き飛ばすかのように、

「それじゃ、早くその宿場町へ向かおう。日が暮れないうちに着かないと。」

と言い勝手に歩き出すのだった。

先程まで街道には二人以外の人影は見当たらなかったが、日没までには帰ろうと、地元の農民たちが農具を片手に家路に急ぐ姿がちらほらと見受けられるようになっていた。遠くの丘の上には牛を引く農夫の姿も見える。なんとものどかな風景である。しかし、その風景の奥くから新たに追跡してくる殺意の影を、二人はまだ知る由もなかった。

第1話 夕陽が見える丘

男女二人の旅人が、ラングという名の宿場町が臨める丘の上までたどり着いた。二人は連れというには、傍はたから見ても、少し余所余よそよ所そしさを感じらる様子だった。と言つても別に喧嘩けんかをしているわけではない。二人の間には、まだ距離感があるようであった。

この二人はロランとセレーヌである。

「どうやら日没までには、間に合ったようだ。」

と高い城壁に囲まれた宿場町ラングを見下ろしながらロランが言う。セレーヌは微笑みで返した。

「ありがとう、ロラン。足が痛くて遅くなった私の速さに合わせてくれてたでしょ。本当はもっと早く着けたのに。私のせいで王都には向かえなくなるし。ロランには、なんだか酷いことしているよね。」

太陽の光がほんのり赤くセレーヌの横顔を照らしている。

「あのまま、王都に向かっても日没までには間に合わなかった

はずだろ？ だったらキミが謝る必要なんてない。危険な野宿をしなくて済んで、むしろ感謝してるよ。」

「……………」

セレーヌは何か言いかけたが、結局何も言わず、ただ軽くうつむくのだった。

ロランは構わず歩き出す。セレーヌもそれに付いて行く。二人の

距離は少しは縮まったのだろうか。

ロランは不図考えた。「セレー又は誰に追われているのだろうか。骸骨戦士のような異形の魔物に追われるなんてことは、尋常ではない。余程重要な人物ということだろうか。」そう思ってからロランは後ろから離れず付いてくる彼女の顔を、何かを確認するかのように振り返って見つめる。

彼女は突然のことに少し驚いたようで、

「何？」

と怪訝そうな顔をして答えた。

「いや、なんでも無いよ。ちゃんと付いてきてるかと思って……」

ロランはそう言うと、また前を向く。「そもそも自分だって、王都に行く目的も自分の事も何も話していないんだ。秘密はお互い様だ。何より、今彼女は助けを必要としている。これは事実だ。だから出来る事はやってあげないと。まだ時間はあるはずだから。」

ロランは無意識に自分の胸に手を当てていた。何か痛むのか、一瞬辛そうな顔をしたが堪え、むしろ以前より胸を張った。その後ろ姿は、さっきより力強く感じられた。

宿場町ラングは王都カルカス・ソナーの東に行くこと20キロの地点にある。その地理的状况のお蔭で、王都から旅するものが最初に寄る宿として、また、日没までに王都に着けないものが前泊する宿として、四方からくる旅人に使われていたために非常に栄えていた。この時もラングの城門付近は、宿を求める旅人や、その旅人目当ての行商人などで溢れ返っていた。二人の姿はその中に違和感な

く溶け込んで、やがて見えなくなつた。

西の空はもう赤くなり、辺りは闇が支配しつつある。城門から覗く宿や屋台の軒先にはポツポツと灯りがともされ優しい光景が広がっていく。上空では一羽のトンビが数回輪を描いて、一鳴きして飛び去つた。

それから、約20分後。再び宿場町ラングを望める丘の上に、男女二人が訪れた。二人は共に馬に乗っている。勿論、ロラン達ではない。どうやらこの二人の方が、ロランとセレーヌの関係よりも親しい関係のようである。

「間に合つたみたいね。ジル。」

一歩先に行く女性の方が振り返って、後ろの男性にそう声をかけた。女性は年の頃は25ぐらいで、男性はそれより2、3歳若そうである。二人とも目が細いからか、普段から目付きが鋭い。どちらも茸毛の馬に乗り、革の鎧の上に青いマントを羽織るといふ同じ格好をしている。はつきりと異なるのは両者の所持している武器で、女性は細剣を、男性は人の身の丈ほどもあるうかという長さの両手剣を腰に佩いていた。二人が羽織る青いマントの留め具は銀で出来た飾りになっていて、中央に竜の彫刻が掘られている。これはカルカス王国近衛師団の、その中でも最強と言われる竜騎士団の一人であることを表している。いわば軍隊の中ではエリート中のエリートである。そして竜騎士という名が示しているように、彼女等もまたロラン同様、ドラゴンズソウル（竜の魂）の使い手でもあるのだ。

セレーヌがロランの剣技を見て、「竜騎士か？」と聞いた理由はここにあった。そもそもドラゴンズソウルなどという魔法は、一般

人には使うことが出来ない技術なのだ。使うために必要となる媒体
一（竜の体の一部で作られた武器）を手に入れることさえ、一般人
にとつて簡単なことではないのだから。なのにロランは使えた。だ
から疑問に思うのは当然なのである。

「エステル姉^{ねえ}。俺はどうも気に入らねえよ。なんで俺らがクロ
ドの奴のミスの尻拭いをしなきゃならないんだよ。」

本当に使えこなせるのだろうかと思えるほど、長大な両手剣の持
ち主は、そう言うとも明らかにふてくされた顔をして馬を止めた。

二人の名は女性がエステル・セドランで男性がジル・セドランと
いう。二人は姉弟^{きょうだい}である。二人の父親は意外にも軍隊出ではなく、
王都の卸問屋を経営していたが、二人しかいない子供はどちらも後
を継ぐことはせず竜騎士になった。しかし竜騎士は軍隊の中でもエ
リートであったから父親も怒りはせず、むしろ親戚中に子供たちの
自慢をする程だった。まず姉のエステルが竜騎士になったことに憧
れて、弟ジルも竜騎士になったと言われている。

「これはラファエル宰相直々の命令だよ。そんな風に思つてはい
けない。さつきクロードの使い魔がラングの上空を舞っていた。先
に報告があつたように、あの町にいるに違いないよ。」

エステルは口調こそ厳しめだが、まるで母親であるかのような優
しい目でジルを見つめながら説明した。ジルはそれでも駄々っ子の
ようにまだ納得いかない様子だ。

「なんでクロードは自分でやらないんだ。さつきだつて俺らに報
告したら自分だけさつさと王都に戻りやがった。」

「別に逃げた訳じゃないよ。ラファエル様へ直に報告するのと、

新たな兵隊を取りに行くと言っていたんだ。」

「新たな兵隊？骸骨求めに戦士した兵の墓場にもあさりに行つたのか。気色悪いやつだ。」

エステルはその言葉には、同意するところがあるようで何も返さず、ただ苦笑いをした。ジルはクロードという男のことが余程嫌いなようだ。ジルは常人には扱えないような長大な剣を振う言わば肉体派であるのに比べ、クロードは同じ竜騎士でドラゴンズソウルを使うとはいえ、竜の牙を利用して作った骸骨戦士を遠隔操作したり、竜の眼を使ってトンビに似た鳥の使い魔を作り、上空から偵察をしたりと、見ようによつては卑怯な技が多い。実際、クロードは慎重な性格で、直接戦うことを好まず、また、策を弄することも多かった。どちらかと言えば直情径行型ともいえるジルとでは、その性格からしても水と油なのであるう。

「ラファエル様もなんで、あんな奴（クロード）を重宝しているのか、俺にはよくわからん。」

調子に乗ってそこまで言つて、すぐジルは「しまった。」という顔をした。

「ラファエル様の事をこれ以上悪く言うんじゃないよ。」

エステルは横目でジルを睨むとそう言つて、停めていた馬の歩を進めた。ジルはしゅんとしてもう黙って付いて行くだけだった。

辺りはもうすっかり暗くなり、西の空のごく一部が赤みを帯びているだけだった。ラングの町は門を閉めても人を入れないということとはしていないが、門番がすでに片方の門を閉じようとしていた。

ロランとセレーヌは宿場町ラングの大通りを歩いてきた。日没前の時間帯ということもあり、往来には我先にと宿を求める旅人が多い。二人も真つ先に宿を探していた。

城門から大通りを1分ぐらい歩いたところに広い交差点があり、その角に周りの宿より少し立派な夕陽丘亭ゆうひがおかていという宿がある。二人がその宿の前にたどり着いた時、宿の前にいた呼び込みの男が寄ってきて声をかけた。セレーヌがその宿の前で一度歩みを止め、興味深げに眺めていたからであろう。

「御嬢さん。宿をお探しですか。安くて良い宿がありますよ。」

「えっ、このお宿ですか？」

セレーヌはその立派な見た目から、どうやら夕陽丘亭が気に入ったようである。

「いえいえ、この宿ではありません。その角を曲がってすぐの所です。でもこの宿と変わらぬくらい立派で、それでいてお安いですよ。」

そう言って呼び込みの男は、嬉々としてもう乗り気になっているセレーヌの背に、触れないようにして手を添え、「こちらへどうぞ。」と言って連れて行くこととする。

しかし、すかさずロランが割って入り、

「もう行く宿は決めているので。」

と言ってセレーヌの手を引っ張っていった。

呼び込みの男はそれでも食い下がろうとしたが、ロランは腰の剣を強調する素振りをして凄んで見せて追い払った。

そんなロランの態度に、セレー又は不満そうな顔をした。

「なんで、断るのよ。」

ロランは軽くため息をついて答える。

「一応、教えておくけど、ああやって呼び込みしているような宿は、ろくな宿じゃないんだ。安いつていうのが嘘だったり、本当に安くても部屋にネズミなんかが出たりと酷い宿だったりするんだよ。それでもいいなら行ってもいいけど。」

「.....」

「この国は重税につぐ重税で貧富の差が広がっている。だからこのご時世、旅をするのは金持ちか仕事で旅する商人ぐらいなんだ。どっちにしてもある程度金を持っている人達だから、安宿は客足が遠のいているんだって、昨日泊まった宿屋の主が言っていたよ。だから土地勘のない無知な客を見つけては呼び込みして獲得しようとしてるんだよ。偉そうに言っただけど、俺も昨日失敗したくちだよ。」

ロランがそう言って、照れ笑いをするとセレー又は不満そうな顔を止めはしたが、笑いはしなかった。むしろ何かに気を病んだような顔をした。

「そう、悪政がこんなところに影響しているのね。さあ、気を取り直して良い宿探しましょ。」

「もう見つけてるよ。この宿にしよう。」

そう言ってロランが指差したのは、夕陽丘亭ゆうひがおかていであった。

「本当にここでいいの？でも、立派過ぎて人目につかない。客も多そうだし。」

セレーヌは、やはり笑顔こそ見せはしないが、自分の気持ちをロランがそれとなく汲んでくれたことに喜んでいるようで、それが声に現れている。

「いや、ここが良い。勿論、単純に立派な宿だったのもあるけど、角にあるから入口が二つあるのが良い。万が一、追手に追われた場合に、逃げやすくなるからね。」

二人が夕陽丘亭に入ると、フロントに立つ初老の紳士が満面の笑みで出迎えてくれた。

「いらっしやいませ。当店は一泊20Gから泊まれますよ。いかがいたしますか。」

ロランが一步前へ出て対応する。

「二部屋並んだ部屋で、値段はいくらでもいいから出口に近い部屋をお願いします。」

「二部屋並んだ部屋ですか。今日はお客様多くてほとんど部屋が埋まってしまっているんですよ。間に一部屋挟んで良ければあるのですが……。」

そう言われてロランが思案していると、セレーヌが割って入ってきて、フロントデスクに身を乗り出して

「それなら、部屋は一つでいいわ。ベッドは二つの部屋でね。それならあります?」

と話しかける。

「えー、それなら空いてますよ。ベッドが別々の部屋ですね。その階段を上がってすぐの部屋と、一番奥の部屋とどちらに、ああ、出口に近い所でしたね。それじゃ階段を上がってすぐの部屋がいいですね。部屋は一つでも二人でお泊りなので、二人分の40Gになります。よろしいですか。前払いをお願いします。」

「分かったわ。私が二人分払います。」

ロランは何か言いたそうにしてたが、セレーヌはさっさと払ってしまった。

「もし、晩御飯がまだなようでしたら、そちらが食事をする場所になっていきますので、ご利用ください。うちのシェフの料理は美味しいと評判で、宿泊客以外の方もわざわざ食べに来てくださるくらいなんですよ。」

初老の紳士はそう言うと、部屋の鍵をセレーヌに渡すのだった。

「どうもありがとう。そんな美味しいお料理なら是非食べてみたいわ。」

二人は今夜寝泊りする部屋へ行き、どちらがどのベットを使うか決めると、直ぐ部屋を出て階下に降り、フロントに勧められたこの宿で食事をすることにした。

そこにはテーブル席が数セットあるのだが、確かに繁盛していて、二人が来たときにはテーブルは一つしか空いていなかった。二人はそのテーブルに座って、そろってシェフのお勧め料理を注文した。すぐにまずは自家製パンが席に運ばれてくる。前菜はまだ運ばれて来ていないようだ。

「セレーヌ。やっぱり宿代、自分の分は自分で払うよ。」

パンを運んできた店員が去ったところでロランがそう言って20G取り出す。

「こんな所で行儀が悪いわよ。まだそんな事言ってるの。さっき部屋でその話は終わったじゃない。いつまでも気にする性質なの？」

「……………」

ロランは、一晩とはいえセレーヌと同じ部屋で寝泊りにすることに なったことに、少なからず動揺しているようで、さっきからどうも 会話がうまくかみ合っていないようだった。会話も途絶え、視線を 向ける先に困っていると、その時、フロントに男女二人連れの客が 訪れ、さっきの初老の紳士が応対するのが見えた。

「それは、ちょっと困ります。」

と、初老の紳士が言つのが聞こえる。二人連れの客がなにやら無理難題を言っているようである。

その無理言う客は、どちらも革の鎧に青いマントという同じ格好をしている。その女性の方が、ロランの方をちらっと見やった。

ロランはその女性と目があつた時、その女性が口元に微笑みを湛えたのを見た気がした。これはもうなんていうか、同じ匂いを感じるというか、あくまで勘でしかないがロランはその二人にただならぬ危険を感じていた。用心するに越したことはない、小声でセレーヌに話しかける。

「鎧姿に青いマント、剣を持った二人組が入ってきた。こっちを気にしている。待て！後ろを振り向いてはいけない。」

「青いマントなの。それはきつと竜騎士よ。こんなところに竜騎士が泊まりに来るはずはないわ。ということは……。」

「なるべく自然に、後ろのドアから外に出るんだ。打ち合わせておいた場所で会おう。できるね。」

セレーヌは黙って頷き、トイレにでも行くかのような素振りです席を立った。

その後二人の竜騎士は、フロントが止めるのも聞かず、ずかずかとロランのテーブルの前まで歩いてきて立ち止まった。

この二人の竜騎士はエステル・セドランとジル・セドランである。エステルは先程までセレーヌが座っていた席に座ると、微笑みを湛えながら静かな口調で、

「ここにいたお嬢様はどこに行ったのかしら。」

とロランに問うのだった。

「いえ、ずっと一人ですよ。」

とロラン。

「すつとぼけるな、ガキが。」

とジルがテーブルを叩いて凄む。エステルは逸るジルの右手で制して話を続けた。

「どうやらフロントで揉めている隙に逃がしたようだね。坊やは随分、勘がいいんだね。良い剣士になるよ。でも嘘はよくないねえ。」

その時、無頓着にも前菜の皿を持ったウエイトレスが、ロランのテーブルの側までやって来て、そこでやっと異様な雰囲気気付いたようで驚きとともに立ち止まった。手には同じ前菜の乗った皿を二皿持っている。

エステルがその皿をあたかも自分に持ってこられた料理であるかのように、自ら手を差し出して受け取ると、自分とロランの席の前にそれぞれ置いて、

「娘がどこへ行ったか、知っているんだろ。どうやら手荒な真似をしてでも聞くしかないようだね。」

とあくまで静かに、微笑みを切らすことなく、聞き分けのない子供に言い聞かすかのようにロランに凄むのだった。

「エステル姉、俺に任せてくれ。小僧外に出ろ。ここじゃ宿屋に

迷惑がかかる。お前も少しはやるんだろ。ガキは俺がしつけてやる。」

ロランは二人の竜騎士に連れられ、大通りへ出るのであった。

夕陽丘亭の前の大通りは、もうすっかり暗くなっではいたが、まばらだが、まだ人影はあった。その人影に紛れてセレーヌが無事逃れていることをロランはただ願うのだった。

第2話 格の違い

それはさながら西部劇の決闘シーンのようであった。竜騎士のエステル、ジル姉弟きょうだいに宿屋、夕陽丘亭ゆうひがおかていから連れ出されたロランは、その前の大通りで姉弟きょうだいと相対あいたいした。

すっかり夜になっていたが、店の軒先の灯りや街灯、窓から漏れる部屋の光でお互いの姿はよく見えていた。月明かりのお蔭もあるかもしれない。今夜は満月だ。

「エステル姉ねえ、ここは俺が相手する　　いいよな。」

「勿論もちろんがまわらないさ。だけど、気を付けるんだよ。坊やも魔法（ドラゴンズソウル）を使えるんだ。この場合、お互いの得物の長さは関係ないよ。」

ジルが一步前に出て、ゆっくりと　　人の身長ぐらいはあるかという長大な剣を抜く。

つられるようにして、ロランも折れた剣を抜き構える。この時、二人の距離は約5メートル　　どちらも一步飛び込んだだけで斬撃が届くという間合いではない。といっても、この場合、それぞれの剣の物理的な長さだけの判断ではあるのだが……。しかし、両者には本当の間合いも分かっているようであった。

緊迫した空気が流れる　　。

周りにはいつの間にか集まったのか、十数人からの野次馬がいて、二人を取り囲んでいた。竜騎士の決闘と聞いて、知っているのか魔

法の火のとばつちりを受けてはいけないと、少し遠巻きに囲んでいようである。

「どうした、小僧。かかってこい！こっちは殺したりはしねえ。娘の居場所を吐いてもらわなきゃならないからな。ちよつと痛めつけてやるだけだ。しかし、なんだその剣はふざけてるのか。まあいい。稽古つけてやる。ほらっ来いよ。」

ジルはそう言ってしきりに挑発しながら、徐々に間合いを詰めていく。

しかし、この男の自信はどこから来るのだろうか。奇しくも姉エステルが指摘したように、この場合、互いの剣の長さは有利不利には関係がないのだ。ドラゴンズソウルの炎によってジルもロランも、その剣先一（殺傷範囲）は実質伸びる。それがお互いどのぐらいの長さになるのか分からないが、実体としての剣の長さに比例するというわけでもなからう。そうになると、むしろ実体としての剣一（竜の鱗製）がより長大で重量のあるジルの方が、不利ともいえる。もつともジルはその長大な剣を小剣のごとく軽々と扱うのだが、しかし、それだけではやはり決定的に有利とはいえないだろう。

「はやくやれ！」「兄ちゃん行け！」「竜騎士なんかやつつける！」

ジルが挑発し、静寂な空気を破ったことで、それに呼応するかのようになんか野次が飛んだ。

重税に次ぐ重税に、洪水、疫病の流行、作物は収穫できず物価は高騰する　と庶民は苦しんできた。それらの元凶は為政者（宰相）であり、その為政者一（宰相）の犬である竜騎士は、庶

民にとっては潜在的な敵なのだ。

4メートル、3メートル半、二人の間合いが縮まる。

先に動き出したのはロランだった。堰を切ったように斬撃を繰り出さず。折れた剣先には、例のごとく折れた部分を補うかのように赤い炎が立ち上がる。「オオー。」という野次馬の歓声。その声をかき消すかのごとくロランはその炎の剣でジルと3合打ち合った。

対するジルは涼しい顔をしながらロランの攻撃をいなして見せた。ジルの剣も炎を帯びている。しかし、ロランのそれとは異なり、炎の色がまるで太陽の光のように黄色く輝いている。

不思議な戦いだった。剣同士が物理的にぶつかり合っているとう感じはなく、その周りを取り巻く炎と炎が激しくぶつかり合っているという感じだ。しかもそういう見方をする、ロランの赤い炎はジルの黄色い炎にまるで弾かれているかのようにであった。

「クロードの奴の報告にあった通りだな。まあ、その歳でそれだけ使いこなせば立派なもんだが……。」

ロランはこれは適^{かな}わじと悟り、小刻みに数歩下がって間合いをとった。ジルはふてぶてしくも軽く剣先を地面に突き刺し、それを杖のようにして右手で持って仁王立ちしている。

いったい何が起きているのだろうか。

「小僧、どこでその猿まねの技を覚えたのか知らないが、良い事を教えてやろう。ドラゴンズソウルは鍛錬を続けることで進化する。初めは赤かった炎の色が、やがて太陽のように、輝く黄色に変わっ

ていくんだ。不思議なことにこの赤い炎で黄色い炎を切ることは出来ない。つまり、俺はお前より上位にいるんだよ。格が違うってことだ。もっとも。剣さえ相手に届けば、炎の色なんて関係ないんだが、残念ながら剣技でも俺の方が上回っているようだな……。

「。」「
ロランはジルのその話を受けて、構えていた剣を鞘に納めた。観念したのだろうか。いや、違う。左腰の鞘に納めた剣の柄を右手で握ったまま、腰を落とし、上体をやや左に捻って居合切りの構えに変えたのだ。戦意は全く失っていない。

「まだ、やるのかよ。やっぱ、ちょっと痛めつけてやらんと分らないか。」「

そう言うと、ジルは地面に突き刺していた剣を抜き、軽く右肩に乗せるようにして構えた。

再び空気が張り詰める。

「坊主。剣先隠して、伸びた炎がどこまで届くか、その間合いを悟られないようにしてるつもりか。無駄無駄、格下に俺は切れねえんだよ。分かってねえなあ。」「

先程と同様、ジルはそう言って話をしながら少しずつ間合いを詰める。これが彼の戦い方なのだろう。

対するロランはじつと構えたままジルを睨みつけて、今にも飛び掛かりそうな殺気を発している。

お互いの間合いが十分に詰まったところで、ロランが緊張のあま

りが二回ばかり咳をした。左手で一瞬胸を押さえる。

「おいおい、どうした、小僧。」

「あなた、鍛錬すると炎の色が変わるとか、言ってたな。赤の上
が黄色だとか。その上は何色なんだ？」

「なんだよ、心配してやってんのに。つまんねえ事言ってるじゃ
ねえ。」

この掛け合いをきっかけに、今度はジルが先に仕掛ける。右肩に
乗せた剣をそのまま振りかぶって、ロランの左肩口目掛けて振り下
ろす。ロランはそれに呼応するかのように、剣を抜き、その剣先を、
振り下ろされるジルの剣に向けて振り上げる。ジルの重い一撃を剣
で受けようというのか。

その時、その場にいたものは、ロランの剣先からまるで竜の咆哮^{ほうごう}
のような轟音^{ごうおん}が発せられるのを聞いた。ロランの剣が赤い炎ではな
く青い炎に包まれる。そう、それは紛れもなく青い！その青い炎が
ジルの剣を、真っ二つに切り裂いた。剣で剣を切る。炎で炎を切る。
異様な光景　　ジルの切られた剣先は一瞬にしてその黄色い炎
を失い夜空に舞った。

「なんだと！」

ジルがそう声を発する間に、ロランは返す刀でジルの体に切りか
かる。ジルはもう、避けることは出来なかった。死を覚悟して元か
ら細い目を更に細めて、青い炎の行く末を目で追う。しかし、それ
は途中で軌道^{きどう}を変え、半歩踏み出していたジルの左足を掠めるだけ
にとどまるのだった。左足に激痛が走る。だが、なぜ切られ（＝殺

され)なかったのだ？

「俺にはあんたを切る理由はない。それより、教えてくれ。なぜ彼女を狙う。何が目的なんだ。」

「お前こそ何者だ。なぜそんな力を持っている？」

ロランの突然の大逆転に、辺りは一時静まり返っていたが、すぐに歓声に変わった。

ジルは左足の怪我を庇い、立膝をついたような状態になっていて動けないでいる。そこへ姉エステルが駆け寄ってくる。

「竜騎士がなぜ彼女を狙うんだ。宰相の命令なのか。彼女は一体・
.....」

ロランのその言葉に、答えたのはジルでもエステルでもなかった。野次馬の中からこんな声が上がる。

「あの娘は王女様だ。」「こんな所に王女様がいるもんか。」「いや、あの顔には面影がある。宰相が王女様の命を狙っているという噂は本当だったんだ。」

こんな殺伐とした話が上がったからか、辺りは騒然となった。さつきよりも人が増えている。さらには「竜騎士を追い出せ!」「王女を守れ!」と声が上がリ騒ぎは広がる一方であった。

「ジル、怪我は大丈夫かい？」

エステルがジルの背に手を添えて優しく声をかける。辺りを見回

すと、既にロランはそこにはいなかった。騒ぎに紛れて消えたようである。

「平気だ。あの小僧、生意気にも手加減しやがった。それより、どうする？」

「妙なことになったね。あたしら嫌われているようだし。それにこのままあの坊やを追っても正攻法では私でも勝てないよ。それにしても、青い炎を使えるなんて、あれはラファエル様（＝宰相）だけしか不可能かと思っていたのに……。」

「ジル、立てるかい。」

「ああ。」

エステルは自らの肩を貸してジルを立ち上がらせると、半歩前へ出て細剣を抜き、胸を張って直立すると、周囲を睨みつけ、毅然とした態度で言い放った。

「あらぬ噂で騒ぎ立てる者！宰相、竜騎士に不満のある者！我の前に来て立ち合え！さもなければ、道を空けよ！」

鬼気迫る様子に気圧され、刃向う者などその場にいるはずもなかった。エステルとジル　二人の行く先は、まさに群衆の間に道が出来ていくかのように開けていくのだった。

宿場町ラングは周囲を城壁に囲まれていて、東西南北のそれぞれ四か所に城門が設置されている。先程、決闘騒ぎがあった夕陽丘亭は西の城門近くに位置している。北の城門付近は、宿屋や商店より

も住居が多く、居住地帯となっていてこの時間帯は静かであった。北の城門から入ってすぐのところ人工の泉があり、その中央には鎧に槍という武装した姿の女神の石像が立っていて、その周りにはよつとした広場になっている。その広場の隣には、この町唯一の聖堂があつて、その裏手が墓地になっている。

ロランとセレーヌはその墓地で落ち合う約束をしていた。

ロランが泉の側を抜けて、息絶え絶えの様子で墓地に辿り着く。墓地まで来ると、聖堂の外壁を背に滑るようにして倒れこんだ。全速力で走って来たからか、息が切れているようだが、それ以上に激しく咳き込んでいて苦しそうである。

「セレーヌ、いるのか。」

辺りを見回すが誰もいない。

「ここよ。どうしたのロラン、大丈夫？」

墓地に立つ木の木陰から、セレーヌが姿を現しロランの側へ駆け寄る。

「ゴホッ、ゴホッ。少し無理したかも。でも大丈夫さ、夜になるといつもこうなんだ。」

「いつもって……。顔色悪いけど、怪我はしてないの？」

セレーヌはそう言ってロランに怪我したところはないか甲斐甲斐かいがいしく確認する。とにかくどうしていいか分からず、落ち着かない様子だ。

「竜騎士は確かにキミを狙っていた。セレーヌ　　キミは何者なんだ……。いや、今はとにかくこの町を出よう。竜騎士は殺してはいない。まだ追ってきているかもしれないし、近くに仲間がいるかもしれない。俺は大丈夫だから、とにかく逃げよう。」

そう言ってロランは立ち上がると、セレーヌを引き連れ北の城門へと向かった。

北の城門は、当然この時間なので閉まっていた。ロランとセレーヌは用心して物陰から様子を伺ってみる。城門の前には衛兵が一人立っている。おそらく城門の外にも同じように衛兵が立っていることだろう。ロラン等が起こした騒ぎは北の城門には伝わっていないらしく、特段変わった様子はなく、衛兵ものんびりした雰囲気であった。

ロランとセレーヌは顔を見合わせ、お互い無言で頷くと、正々堂々と門へと近付いて行った。こんな時間に外へ出ようというのだから、少しは怪しまれるだろうが、目だった行動をとるわけにもいかないし、時間もない。適当に言い繕^{つくろ}って門を開けてもらおう算段であった。

ロランが北の門の衛兵に話しかけようとしたまさにその時、衛兵の方から寄ってきて少し下がれと両手の平で押し込む動作を見せた。

「え、引き止める気か。」

戦うことも止む無しとロランは覚悟を決め、剣に手を伸ばそうとしたが、すぐ誤りに気付いて止めた。

ゆつくりと門が手前に開き、数名の商人風の旅人が現れたからだ。彼らを入れるために門を開けようとしていただけだったのだ。

「ありがとうございます。」「こんばんは。」

彼らは口々に衛兵にお礼を言いながら入ってくる。

ロランとセレー又はその機に乗じて、彼らとはすれ違いで黙って町の外へ出て行くのだった。

町の外は闇　　灯りなどない。しかし今夜は運良く満月のため、月明かりでほのかに道は見える。その道に沿って二人の男女は足早に闇の中へ去っていくのだった。少なくともこの夜、二人の後を追う者はいなかった。

第3話 真実と噂

宿場町ラングの北の城門から逃げ出たロランとセレー又は、闇の中の見えない追手に脅えていた。ある程度道沿いに進んだ所で、道を外れ手近な森の中へと入っていく。このまま道沿いを進んでいると、容易く追手に追いつかれるからという配慮だが、実際の所、追手は来ていなかった。

どちらにしても、結局今夜は暖かいベットを得ることは出来ない。どこか野宿するための適当な場所を探さなければならなかった。

ロランは時折、まだ咳き込むことはあったが、顔色は良くなってきた。ロランが咳き込んで立ち止まる度に、セレー又が「大丈夫？」と声をかける。

森の中を当てもなくしばらく歩いた所で、少し開けた場所に出た。その奥が岩壁になっていて、そこに巨人の手で一掻き抉り取ったような浅い穴が開いている。雨風を凌ぐにはお誂え向きの場所だ。現に、以前誰かがここで野宿したのか、たき火の後が残っている。

「今夜はここで過ごそう。」

ロランがそう言うと、セレー又は辺りを見回して、

「そうね。ここはどの辺かしら……。」

と答えた。

二人はラングの町を出てから、もう二時間以上は歩いている。途中道を外れてきたが、おそらく北か、もしくは若干北東かもしれないな

いが、10キロ程度進んだ所だろうか。

とにかくこの浅い洞窟が今夜の宿である。快適とはほど遠いがとりあえず今晚寝泊りする場所が見つかったので、ロランはまず真つ先に、咳が収まるようにと胸を押さえ壁を背にして座り込んだ。セレー又はたき火をしようと付近から小枝を集めてきて、どうやって火を着けようかと思案している。

そこへロランがやってきて、折れた剣先を小枝の塊に向け、魔法で火を着ける。

「ふふっ、それ便利ね。」

二人は、まだ頼りなく燃えるたき火を囲んで座りこんだ。

「ロラン、お腹空いた？これ、食べる？」

そう言ってセレー又が取り出したのはパンであった。夕陽ゆうひがおかてい丘亭で前菜の前に出されていたあのパンである。竜騎士の追手のために、一切食事は食べることはできなかったのだが、ちょうど逃げ出す前にパンを手にしていたようである。

セレー又は少しつぶれたそのパンを半分に切って、ロランに手渡した。

「ありがとう。これ、宿屋のパン？いつの間持ってきてたの？」

ロランが笑い、次いでセレー又も笑った。二人の緊張の糸はやつと緩んだようである。

「水無しでパン食べたなら、また咳き込んだじゃうかもね。大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。」

二人はそう言うと、目を合わせた。だが、すぐに視線をそらし、二人ともたき火の炎を見つめて黙り込んでしまう。

森は寝静まっっていて虫の音一つ聞こえない。

先に沈黙を破ったのはロランだった。

「あのさ、こうなった以上、俺もこの後どうするか決めなきゃいけないと思っている。だから……さ、キミが何故、竜騎士に追われているのか、その事情を教えてくださいませんか。」

ロランはそう言い終わって軽く咳き込んだ。それはちょっとわざとらしく、緊張を隠すためにしたようにも見えた。

「もうたぶん、察しはついてるんですよ。ごめんなさい。騙すつもりじゃなかったのだけど……私の本当の名はリリア・ラシエル・ラブレ。この国の王女よ。」

そう言う彼女の様子は臆する所が全くなく、高貴な出であることを十分に示していた。その事はロランも疑いようがなかった。だが、ロランはそれ以外のところで引掛かっているらしい。

「俺じゃ信用できないから偽名を使っていた？」

「そういうわけじゃないわ。ロランがどうかじゃなく、城外に出る以上、なるべく正体がばれないようにしなければならなかった

の。周りに悟られないように逃げてきたつもりだったし。幸い最近、公務で国民の前に出ることも少なかったから、見た目ではばれないかと思って、それで偽名を使っていただけよ。ロランはそういうの気にする人なの？」

「いや、別に。それより、何故城を出る必要があったんだ？宰相や竜騎士に命を狙われているから？その噂は本当なのか？」

「うーん、そうね。」

リリア（＝セレーヌ）はそう言うと、いったん整理してから話そうというのか、たき火に小枝を追加する作業をして間を置いた。

「逃げてきた理由は少し違うわ。宰相ラファエルは、私の父、国王リシャルが長く病の床に臥ふしているのをいいことに、独裁政治を行っているの。この夏の洪水で作物は凶作だったというのに、相次ぐ重税を課して国民を苦しめ、自分は賄賂を貰って私腹を肥やしているのよ。しかも国民に不満が出ているのを知ると、他国へ戦争を仕掛けることで、その不満の矛先ほしを変えようとしているの……。私は彼が嫌い。なのに、父はラファエルの言う通りに操めとられてしまっていて、王としての権力を望むラファエルに、私を娶めとらせようとしたの。だから、逃げ出してきたの……。」

「そうか……。」

ロランは興奮気味に話すリリアに対し、かける言葉に窮きゅうした。何と言ったらいいものか。

「そう、逃げてしまったのよ……。私は王女という立場に生まれたのに、その立場を放棄して逃げてしまった……。」

王女ならもつと出来ることもあつたはずなのに……でも……でも、仕方がなかったの。父もそうだけど、母も私の味方ではなかった。私は病死した前妻の子で、今の母（＝妃）は継母^{はは}なの。だからか、私にはもとから冷たかった。きつと今の妃と国王との間に子が出来ていたら、私はとつくに消されていたわ。表向きは病死でね。きつと私の母も……あの城には味方はいないの。だから逃げ出すしかなかったの。」

リリアの瞳に、焚^たき火の光が反射して輝く。

「分かった。少なくとも竜騎士やラファエル宰相は、キミの命を狙っているわけではないようだね。宰相にとつては結婚相手なわけだし、それは行き過ぎた噂だったようだね。」

「いや、違うわ。あの人達は、私が城を脱出する手助けをしてくれた私の侍従達を皆殺しにしたの。私の侍従は私のために命を賭^として逃がしてくれたのよ。ラファエルは確かに私を消すために竜騎士を差し向けたわけではないでしょうけど、婚儀^{こんぎ}を済ませて王位継承権を得たら、私の事は消そうと企んでいるの。だって、知っているのよ。あの人と妃は結びついているのだから……。」

時の権力者が、その権力や地位を得るために男女の関係を利用する、もしくはその裏に男女の関係がある、というのは歴史を紐解^{ひもと}いても珍しい話ではないが、噂よりも、事実はこのなにも複雑でどろどろしたものなのか、と当事者の話を聞いて思い知らされる。

人は何故そこまでしてでも権力を欲するのだろうか。

「ごめん。事情は良くわかったよ。リリアは……、あ、リリアって呼んでもいいのかな。」

「いいわ。ここには二人しかいないし。」

「じゃあ、リリアはこれからどうするつもりなんだ？国境へ行くって言うてたけど、そのまま逃げ続けるつもり？」

リリアはまた小枝を拾い、しかし今度はそれを焚き火には入れず、その枝を使って焚き火の周りの燃え残った小枝を火へ寄せた。パチパチと音が上がる。

「数年前、ブリュノ・ルグランという私の教育係で王の政治顧問もしていた人がいたの。私の先生ね。その人からこの国の実情を覚えてもらったの。だけど、ラファエルが宰相になると、先生と対立するようになって、結局先生は国外追放されてしまった。その後、先生は隣国カートランド王国に亡命して、今はこの国を救うために有志を募っているって聞いたわ。だから、ブリュノ先生に会って力になって貰おうと思うの。」

「カートランドか……。そのブリュノって人は本当に頼りになるのか？」

「もちろん。私にとってブリュノ先生は憧れの人……。いや、勘違いしないでよ。先生は40過ぎたおじさんなんだから。」

「えっ……。そう……。うん、分かった。決めたよ……。キミをそのブリュノ先生の所まで、俺が無事送り届ける。」

「いいの？大事な用事があるって。」

「いいんだ俺の用事は後でも……。この国の一大事より

大事な用事ってないだろ？俺だってこの国の民だ。」

「ありがとう………。安心したら眠くなってきちゃった。もう眠ってもいい？」

そう言うのが早いか、リリアはそのままロランに寄り添うようにして眠りについてしまった。ロランはどうしていいか分からなかったが、とにかく彼女が寝やすいように、自分の肩に寄り掛かるようにして寝ている彼女の頭を、右腕の上に載せかえて、しばらくそのままにしてあげることにした。

場所は変わって、王都カルカス・ソナー。

王都の北側中央の高台に王の住まいラブレ王宮があり、その王宮の東にラファエル宰相の執務室がある。宿場町ラングにてロランに阻まれ、リリアを逃したセドラきょうたいン姉弟の姉エステルは、馬を飛ばして、その日の内に王都に帰り、もう深夜であつたが状況を報告しようとして一人で宰相執務室へ訪れたのだった。

エステルが執務室へ入ったとき、ラファエル宰相の机には決済待ちの書類が山積みされているだけで、宰相の姿はなかった。代わりに机の後方、窓際に影のようにして立つ優男やんめいが一人いただけだった。

「何故、お前がここにいる。」

エステルが冷たく言い放つとそれに答えるかのように、優男が振り返る。男はまるで病気であるかのように青白い肌をしている。彼の名はクロード・サン＝シモン。彼も竜騎士である。しかし、彼の技はエステルやジルのように竜鱗を鍛えた剣で炎を操るのではなく、

戦士の遺体に竜の牙を埋め込んで骸骨戦士として操ったり、竜の眼を使って千里眼のようにして遠方の様子を伺ったりと、彼独自に研究して得た特殊なものばかりである。そう、ロランがリリアと最初に出会った際に倒した骸骨戦士は、彼の作であった。

「フフ……このような夜遅くにやってきて、何を言う。宰相はとっくに御就寝なさっておられる。報告があるのなら、私が聞こう。」

クロードという男は確かに生きていたが、見た目にも生気がなく、話し方にも感情がない。もっともセドラン姉弟とは馬が合わないから、こういう話し方になってしまっているのかもしれないが。

「お間に報告することなどない。私は宰相の命令で動いた。宰相がいないのであれば、明日朝出直してくる。」

エステルはそう言って早々と部屋を出ようとした。しかし、クロードが即座に抑揚のない声で呼び止める。

「エステル、待ちなさい。事は危急を要します。命令権の事を気にされているようですが、今からあなたを含む竜騎士は全員、私の指揮下に入ります。ここにラファエル宰相が下された任命書がございます。検めますか。」

「なんだと！」

エステルは今にも剣を抜き襲いかかりそうだ。クロードはそれには怯まず、任命書をまるで盾のようにして掲げて話を続ける。

「あなたも軍人なら、上官の命令が絶対なのは分かっておられる

でしょう。　　いえいえ喧嘩を売っているわけではありませんよ。目的は一緒なのですから、仲よくやりましょう。　　分かっていただけますか。では、報告を。」

エステルは悔しそうな顔をしたまま、しぶしぶクロードに報告をするのだった。

宰相の執務室　　エステルからの報告を一通り黙って聞いていたクロードが口を開いた。
いつから降り出したのだろうか、窓に雨が当たる音が強くなっている。

「では、リリア王女がラングにいたのは確かなのですね。」

「ああ。」

「そこで、ドラゴンズソウルの炎を使える例の少年に邪魔をされたと？」

「そうだ、あいつはとんだ食わせ物だったぞ。お前の報告とは違い、ラファエル様と同様の究極の青い炎を使ってきた。私の弟はそのために負傷した。」

「ジルさんですか……………。命に別状はなかったようですね。大丈夫だったですか。」

「お前に心配などされたくない。それに軽傷だ。」

「心配しますよ。この場に来ていませんしね。ジルさんには大事

な任務を担っていただきたいと考えていますから……。まあ、それは直接本人に話すとしましよう。それにしてもあなたの方考えが甘いですね。」

「なんだと！ドラゴンズソウルの炎の色は、見た目だけの問題ではない。お互いの力の差を如実に表している。鋼の剣に青銅の剣で挑むようなものだ。勝負は見えている。炎を使えぬお前には分からないのだろう。」

クロードはそう言って食って掛かってくるエステルをいなすように、再び窓際まで歩いて行き、雨の音が気になるのかカーテンを閉めるのだった。

「そうですね。その少年の力量は確かに想定外でした。しかし、今回の命令は『リリア王女を遺体となつてもいいから連れ帰れ』というものだったはず。手練れの竜騎士が二人もいたのですから、一人は王女を追って手にかけていれば良かったのでは？王女が相手ならば、炎の色など黄色でも青でも関係ないでしょうに。」

「なにを言う！竜騎士は宰相の管轄と言えど、王を守るための兵。その兵が王の娘を殺めて良いという法はない。」

「おや、先程ご自身でおっしゃっていたように、この命令は宰相から出たもの。そう思うなら宰相に言えばよかったですでしょう。」

エステルは「くつ。」と短く呻いただけで、何も返せなかった。確かにそうなのだ。一度この理不尽な命令を認めているのだ。

「それにリリアは王女であることを放棄したからこそ、城を勝手に逃げ出したのです。それで王女と言えるのですか？国民に知られ

る前に殺していれば問題はなかったのですよ。私の術で宰相との婚礼の儀までは肉体を腐らせずに操ることも出来たのですから。」

「その後、病死とでも偽るのか。」

「ええ、分かっているではないですか。なのに、王女を気遣って、その上誰も傷つけまいと公然と決闘などし、みすみす逃してしまうとは。やはり甘いとしか言いようがないでしょう。今後はこのようなミスが無いようにお願いしますよ。」

ずっと無表情であったクロードだが、最後の一言を言うときの目付きは鋭かった。

「それで、『今から言つて王女を殺めてこい。』というのがお前の命令か。」

「フフ………。何を言っているのですか。状況は刻一刻と変わるのですよ。ラングで起こしたあなた方の騒ぎで王女が城外にいることが、国民に知られてしまいました。竜騎士が出向いて堂々と殺しなどしたら、国民の信頼を失いますよ。国民には徳をもって接しなければ。当然生け捕りにします。」

そう言つてクロードはエステルを誘い、執務室の中央の机に設置されている王都周辺の地図の前まで伴つて、それを指で差しながら話しを続けた。

「ラングの北の門から逃げたとおっしゃってましたね。おそらく王女はしばらく北の道を行き、東にそれてこの辺りで野宿でもしているでしょう。」

「何故、東と分かる？」

「王女の目的はおそらく東の隣国カートランドでしょう。だから東。ですが、この場合、西でも東でもいいのですよ。むしろ、わざと一端、逆の西に行くふりぐらいは、しているかもしれないね。でも、結局は東に向かいます。そしてこの雨、明日も降り続けるでしょう。だから王女は今度こそはと宿を求める。おそらくラングの北東、この平野付近のいずれかの集落に宿を求めて向かうでしょう。これより北は山ですし、南は沼地ですからね。」

「では、その辺りの集落で待ち伏せるのが、お前の作戦なんだな。私はどこへ行けばいい。」

「いえいえ、そんな所で待ちませんよ。王女が通る所は分かっています。そこへ先回りして待ち伏せしていればいいのです。この雨が味方してくれましたよ。国民にとっては洪水をもたらす忌嫌う雨でしょうが、私にとっては恵みの雨ですね。」

「いちいち嫌味な奴だ。策を弄するのは自由だが、国民は大事にした方が良くぞ。徳とやらのためにも。」

「ええ、ご忠告にしたがいましょう。エステルさん。あなたは私と一緒に来てください。少年の相手をしてもらいます。倒せとは言いませんよ。足止めしていただければいいです。ちなみに、ジルさんには別任務を与えますが、別行動でも問題ないですか。」

「どちらの心配をしている。二人ともいい大人だ。問題はない。しかし、ジルの怪我は大したことないのは確かだが、剣は折られているぞ。」

「折れていてもあなた方には関係ないのでは？話はこれだけです。出発は明日日の出とともに。それまでゆっくり休んでいてください。」

基本的に無表情のクロードが、無理に笑おうとしているのか、ぎこちない笑みを見せる。

「失礼する。」

エステルはクロードの笑みには、まるで気付いていないかのように答えず、さっと踵を返すと、高々と足音を立てながら執務室を後にした。

第4話 策士の策略

昨夜から降り出した雨は、朝にはやや小降りになっていたが、まだ降り続けていた。秋に入ったばかりではあったが、ここ数日は寒い日が続いたのに比べ、今日は比較的暖かった。

ロランとリリアは雨に濡れるのを承知で、カートランド王国目指し東へ進む道を歩いていた。

こんな天候なので、すれ違う人の数は少なかった。その雰囲気に変わったところはなく、王女がこうして国外へ逃亡しようとしていることを、皆まだ知らないのではないか、追手はもう来ていないのではないか、とロランらは自分たちに都合の良いことを考えてしまっただけだった。

リリアの話では、この先にガルグイユ川という大きな川があり、その先にいくつか集落があるという。その辺りはガルグイユ川がもたらす肥沃な土の恩恵で、国内でも有数の小麦の生産地になっていた。集落とはそのほとんどが農村である。

その農村の一つに、リュタンという名の十数世帯からなる村がある。リリアが言うにはその村に、逃亡時に殺されてしまった侍従が手配してくれていた仲間がいて、馬や食糧など、これからカートランドへ向かうのに必要な物資を用意して待っているのだという。

「ロランがいれば、最悪、野宿でもいいのかもしれないけれど、馬や食料は必要でしょ。だからリュタン村に寄りたいの。待ち合わせ日は昨日だったから、まだいればいいのだけれど……」

「いや、確かにそれも心配だけど、俺が一番心配しているのは、

その村は本当に大丈夫なのか、ということなんだ。ラングの時は、
どという訳か、あっさり追手に追いつかれていたように思える。ま
あ、あの辺りで宿を求めたらあの町しかないということ、簡単に
推測できたのかもしれないが……。」

ロランの心配ももつともである。追手が付いてきている様子はな
いが、そもそも先回りして待ち伏せしているかもしれないし、人目
に付けば、その分、追う方にとっては情報を得やすくなるのだから。

「たぶん大丈夫……。その辺りには農村が沢山あるし、
広い範囲に点在しているから、全部の村に追手を差し向けるなんて
事は出来ないわ。それにリュタンで待っている仲間は一人のようだ
けど、その村の人全員が味方になっているって侍従は言っていたか
ら、情報が漏れることもないと思う。とにかく急ぎましょう。」

二人の歩く道は砂利を敷いて整備されてはいるが、昨夜からの雨
で所々に水たまりがあり、歩き辛かった。雨はまだ止む気配がない。

ガルグイユ川東岸。

石作りの立派な橋が川を横たわっている。その橋を渡り切った所
で、エステルは早朝からずっと走り続けてきた愛馬を止め、その背
を撫で健闘をいたわっていた。

少し遅れてクロードが同じく馬に乗ってやってきて、エステルに
声をかける。

「今朝も話しましたが、ここで、エステルさんと私、それと私の部
下数名は道の両脇の森に隠れて待ち伏せします。よろしいですね。」

「ああ、だが、この橋を通るとは限らないのでは。」

「そんなことはありませんよ。今、川を渡るにはこの橋を通るしかないのです。上流にあった二つの橋は先日の洪水でどちらも流されていますし、昨夜からの雨でこの流れですから、渡し船も今日は動いていないのですよ……。だから言ったでしょう。恵みの雨と……。」

「そう思惑通りに行けばいいがな……。あの坊やは結構勘が良いぞ。ここに隠れていても気づいて逃げられてしまうかもな。」

「その報告、既に聞いていますよ。勘が良いというのは、過去の経験に照らし合わせて、何か違和感があるとか、こうすればまた成功するとか、そういうことを直観的に感じて行動に移すことを言うんです。作戦はもつと論理的に考えないと……。既に先程私の特殊部隊に指示を出して準備をしておきました。きっと、その少年の勘の良さが仇となって畏にはまってくれることでしょう。」

雨が降っているとはいえ、既に小降りで、雲も薄くなっているから、まだ正午になるぐらいの時間なので意外と明るい。しかし、そんな中でもクロードの顔はやはり青白かった。それでも自信にあふれているのか、目だけはギラギラしている。エステルはそれ以上は何も言わず、ただ東の空を眺め、今朝会ったきり、別行動をすることになったジルの安否を気遣うのだった。

ロランは嫌な感じがしていた。表情は硬くなり、何か考え込んでいるのか、しぶい顔をしている。

それもそのはずである。リリアが先導して訪れた橋は、到着した時にはそこになく、地元の人に聞いたところ数日前の洪水で流され

てしまったというのだ。ロランには、それを知らなかったりリアを責める気は全くなかったのだが、今、川を渡れるのはそこから数キロ下流にある橋のみだ、という状況が、引つかかっているのだ。もし、この事情を追手側が知っていたら……。リアの言うように、各農村に人を差し向けるのは難しいが、必ず通ると分かっている橋で待ち伏せするのは容易いではないか。

「ロラン、さっきの人が言っていた橋……。良かった、流されてない……。雨も止んだみたい。」

道案内役を兼ねてロランの少し先を行くリアが、振り返って微笑む。

二人は既にその橋の手前、昨夜の雨で水位が高くなっているガルグレイユ川の西岸に到着していた。確かに、いつの間にか雨が止んでいる。

「そのようだね……。リア、もう一度聞くけど、今川を渡るにはこの橋を通る以外、方法はないんだよね。」

「うん……。何か感じるの？」

思えば、ロランとリアの最初の出会いの時も、ロランは森に待ち伏せしている者がいる事を感じていた。リアもその事を覚えていたのである。そしてロランはやはり今も、橋を渡った向う岸に違和感を感じていた。見た目には誰もいないのだが、殺気だっているというか、妙に静か過ぎるのだ。

「リアは、ここで待っていてくれ。何かあったらすぐに逃げるんだ。」

ロランはそう言うと、一人で橋に足を踏み入れる。橋は数人すれ違えるほどの幅があり、長さは百メートルほどである。石造りの橋は見た目にも丈夫そうで、洪水でも流されなかったであろうことがよく分かる。

ロランは橋を渡る途中、二度ほどリアの方へ振り返ったが、特に変わった様子はなかった。慎重に歩を進めて行き、橋の半ばあたりまで辿り着いたとき、川辺の草むらにいた雁が数羽飛び立ち、まるでそれを合図にしたかのように橋を渡り切った先から、数人の兵士が姿を現した。

それは、生きた兵士であった。兵士達は一斉に弓を構え、狙いをロランに定める。ロランはその場で歩みを止め、剣の柄に手をかけて構え応える。一斉に射掛けられる矢を、剣で振り払う自信があるというのだろうか。

一触即発の緊迫した空気が流れる。

その空気を裂くように、兵士達の合間から青いマントを羽織った一組の男女が悠々と現れ出る。一人はロランが見知った顔、もう一人は血色の悪い顔をした優男である。そう、竜騎士のクロードとエステルである。クロードが丸腰のまま、さらに一步前へ出て、弓を構える兵士達に手で合図を出し構えをとかせる。エステルは我関せずという体で、そっぽを向いて川の流れを見ていた。

「お初にお目にかかります。私はクロード・サン・シモンと申します。近衛師団第2部隊隊長をしております……あなたはロラン様ですね。ラファエル宰相から話は聞いております。」

ロランは構えを解く。しかし明らかに困惑した顔を見せた。エステルもまたクロードの話に驚きを隠せないでいる。そして何より・

.....

「嘘.....、どういふことなの罗兰。あなたは.....」

リリアは兵士が現れたのを見て、罗兰が心配になり、待っていてくれという指示を聞かず、罗兰の後ろ数メートルの所まで橋を渡ってきてしまったのである。

「リリア.....何故ここに。」

「罗兰.....。あなたと、ラファエルは知り合いなの？」

罗兰は頷く。

「ごめん。騙すつもりではなかったんだ。ラファエルは俺の義兄だ。王都へ向かうのは分けあってラファエルに会いに行くためだった。でも、今は違う。キミを守りたいんだ。とにかく信じて欲しい。もつと後ろに下がっていてくれ。」

リリアは何も言わず後ずさる。いや、困惑して何も言えないのかもしれない。その表情から、動揺の色を隠せずにいた。

「罗兰さん。やはり、我々と事を構えるというのですか.....。お兄様がお嘆きになりますよ。リリア姫もお待ちしておりますよ。逃げずにこちらへいらしてください.....。まあ、しかたがないですね。」

そう言ってクロードは、右手を挙げ指を鳴らし何か合図を出した。

ンさんも大人しく付いて着ていただけですか。」

そう自慢げに話すクロードの言葉を聞いたか聞かずか、ロランは構わず振り返り、リリアを助けに向かおうとした。

そこへ黄色い炎が立ちはだかる。

ロランの左後方からロラン目掛けて、黄色い炎をまとった細剣が突き出されている。

「待て。ひとつ私の相手をしてもらおう。」

エステルである。エステルもジル同様、やはりドラゴンズソウルの炎を使う。色は黄色だ。ドラゴンズソウルで発することが出来る炎には、その成熟度というか、魂の力を生成する能力に応じて色が変化していく特徴がある。初めは赤、次が黄色、最後が青である。この色の違いは炎の力の差を現し、下位の炎は上位の炎に必ず打ち負かされる。色の異なる炎をまとった剣同志がぶつかると、ジルの剣がそうであったように下位の炎は、場合によっては剣ごと折られてしまうほどだ。

つまり、見た目にも明らかに力が劣る（＝下位の炎しか扱えない）エステルが、ロランに真っ向勝負を挑むというのは、それなりに勝算があると踏んでいるからなのである。無論、クロードに命令され、嫌々戦わされているというのものもあるかもしれないが、リリアを人質に取られ、自身には複数の矢を向けられているロランの剣先が、少なからず鈍るであろうことぐらいは、考えているのである。

果たしてその思惑通りにいくのだろうか。

ロランは、後ろに跳んで間合いを取り、剣を鞘に納め、そのまま柄を握ったまま居合の構えを取った。ジルと戦ったとき見せた青い

炎を出す時の構えである。

エステルもそれを十分承知しているので、すぐには攻撃を続けなかった。ロランの青い炎にジルはやられたがエステルはどう対処するつもりなのか。

ロランが間合いを徐々につめる。

「ゴホッ、ゴホッ……………」

しかし、ロランの攻撃は成就しなかった。自分の体から出る咳の発作で中断される。気温の下がる夜や極度に集中したときにどうしても起こる発作のようだ。ロランは耐え切れず左胸を押さえ、その場に片膝をついた。咳は単なる咳だけではなく、今回は吐血している。

その隙について、クロードの弓兵の一人が矢を放った。それがうずくまるロランの右肩に貫通する。

「クッ……………」

「ロラン、ロラン！」

リリアが堪らず叫び声を上げた。

エステルは一瞬、余計な事をとばかりに弓兵を睨んだが、それでもすぐに気持ちを切り替え、ここぞとばかりにロランへの追撃を行う。ロランはそのまま左に転がることで、かろうじて黄色い炎の鋭い突きをかわした。さすがに自分の剣を出して攻撃を受けたり、反撃したりは出来る状態ではないようだ。ロランは深刻な病に侵され

ているようである。

エステルは避けられても構わず、再度追撃を敢行する。ロランはこれはもうどうにもならないと覚悟し、このまま刺されて死ぬくらいなら、最後の力を振り絞って、橋の欄干らんかんへ飛び乗ったかとおもつと、その勢いのまま川へと飛び込んだ。

クロードの命令か、ロランが飛び込んだ辺りを目掛けて複数の矢が放たれる。

「ロラン……………。なぜ、なぜロランを……………」

リリアの悲痛な訴えに応える者はなかった。

先般からの雨で川は濁り、しかも流れが速い。おそらく既に下流に流されていると思われるのだが、ロランの姿は橋上から確認することは出来なかった。

欄干らんかんに身を乗り出して、川を確認するエステルに、クロードが近寄って声をかける。

「姿が見えませんが、間違いなく溺死でしょう。エステルさんは、よくやってくれました。宰相にもきちんと報告しておきますよ……………。どうも御心配されているようですから、念のため、後でリザードマンに遺体を搜索させときましよう。」

「……………」

エステルは渋い顔をしたまま黙っていた。ただ、その川を見つめる表情には、若干の後悔の色が見て取れなくもない。どのような心

境なのだろうか。殺すことはなかったという後悔だろうか。それとも、竜騎士のプライドを賭け、お互いの持てる技を全力でぶつけ合っ
つて勝ったわけでないという後悔だろうか。

その後は速やかに肅々と、クロードの部隊はリリアを伴ってその
場を立ち去って行った。橋に一人残されたリザードマンが頃合いを
見て川へと飛び込んでいく。

雨はすっかり止み、空には晴れ間が見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3217y/>

ドラゴンズソウル 竜の魂

2011年11月24日00時46分発行